

歴史災害から見る名古屋〔江戸時代〕

城下町『なごや』の開府 ～清須越し～

尾張藩が清須から名古屋に遷府したのは、五条川の氾濫による被害を度々受けていた清須城下から、水害の影響が少なく地震にも強い場所に移るということも理由の1つだったようです。

風水害

明和4年7月(1767年)

庄内川は西区比良・大野木付近で氾濫し、味鋺・如意や①城下町(納屋橋)で土砂災害となりました。この氾濫により、市の北東部から西部一帯が浸水しました。「庄内川八合八勺の出水、同夜猪子石村南へ、比良・大野木村北へ、中須村東へ切れ込み、」(首藤柳左衛門日記抄)



【城下町で起きた土砂災害】

安永8年8月(1779年)

庄内川は豪雨により一瞬で洪水となり、川沿いの志段味・②味鋺・比良・大野木辺りで堤防が切れ、辺り一面は泥の海となり、民家や田畑は水没しました。「風雨強く、諸々大洪水、切れ所多し、志段味・上条・あじま・ひら・大野木切れて(中略)一面に海のごとく」(猿猴庵日記)



【決壊した堤防の様子】

文化12年6月(1815年)

大雨で庄内川の枇杷島小橋が流され、天白川では③野並地区の堤防が切れて浸水し、熱田の八丁堰(熱田神宮と笠寺を結ぶ道)・緑区鳴海付近でも浸水しました。「枇杷島小橋の方堤切れ(中略)熱田八丁縄手長屋辺水入り、天白橋損じ、鳴海水入り」(渉猟雑抄)



【渉猟雑抄表紙】

天保8年8月(1837年)

台風の暴風雨により名古屋城はじめ城下町各地で被害があり、中区④若宮八幡宮内の芝居小屋(市川海老蔵一座)が損壊し、熱田区の熱田神宮など各所で倒木が起きました。「若宮芝居小屋屋根へ性高院より大松枝吹き来り大損壊」(見聞雑割)



【若宮八幡社の様子】

嘉永3年8月(1850年)

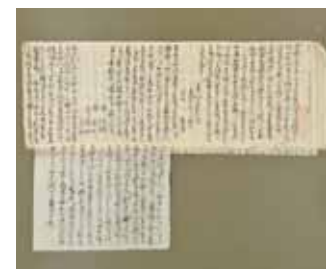
大雨が降り続いたため、天白川流域では瑞穂区中根町で破堤し、南区⑤笠寺から熱田区伝馬町付近が浸水しました。「夜に入りて甚雨洪水なり、一夜の内止む間なく降る(中略)天白川中根村の方へ切れ入り、笠寺観音前より東坂下の出屋敷の内は床上二尺も水浸りと云う」(松濤樟筆)



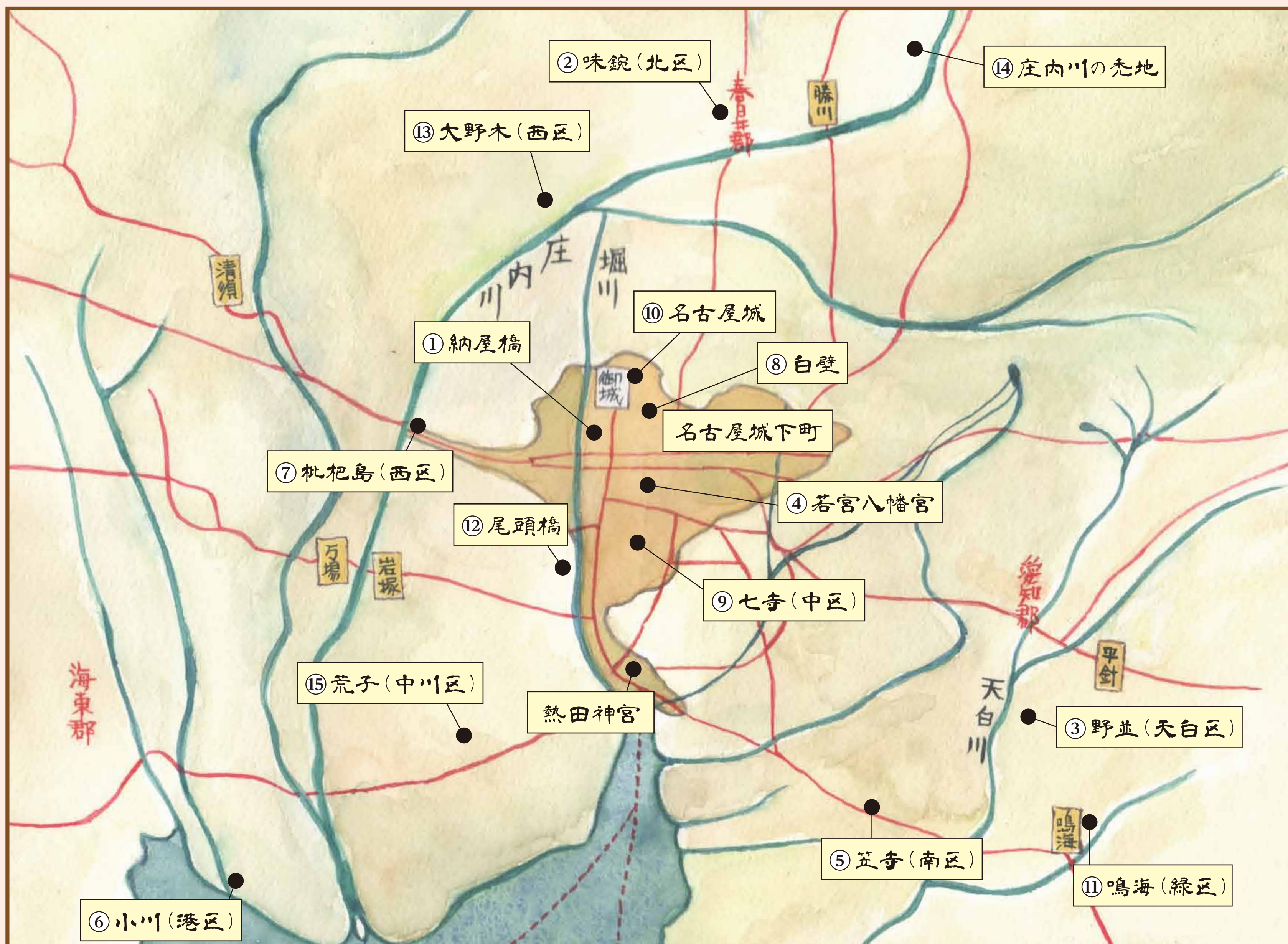
【松濤樟筆表紙】

万延元年5月(1860年)

暴風雨により、伊勢湾に高潮が起り、現在の港区⑥小川付近の堤が切れたことにより小川付近で浸水しました。また、出典の水口屋文書には、この地区の人々は相次ぐ高潮に悩まされたとの記載もあります。「大風津波新田堤切れ込み入水に付き、」(水口屋文書)



【水口屋文書原文】



尾張志付図をもとに作製

地震・津波

宝永地震【宝永4年10月(1707年)】

有史で最大級の南海トラフ地震と言われている宝永地震では、⑦枇杷島東にあった大橋が中ほどで沈み、周辺の堤が最大200~300間(約360~540m前後)の長さで壊れました。「枇杷島東の大橋中程四五間柱沈む、六七寸、法界川新屋(ニイヤ)堤裂け崩る」(鸚鵡籠中記)



【鸚鵡籠中記原文】

当時、尾張藩士の屋敷があった東区⑧白壁の北端で、地面が裂けて泥水が噴出したという記録が残っており、この辺りで液状化現象があったことを伝えています。

「水近き地所は地裂け泥水湧出す、あるいは地型五六寸程ずつ沈む」(鸚鵡籠中記)

文政近江の地震【文政2年6月(1819年)】

出典の世直し草紙には、城下町の⑨七寺の被害の様子を始めとした名古屋で起きた被害が鮮明に描かれています。「世の諺に地震・雷・爵彼(くわじ・火事)・親仁と言いて、おそろしき物の巻頭とす、これを思えば地震程気味の悪い事は有るまじきにや」(世直し草紙)



【七寺(中区大須地区)の被害の様子】

安政東海地震・安政南海地震【安政元年11月(1854年)】

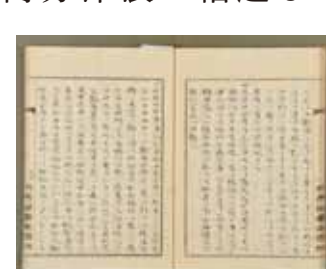
この地震で⑩名古屋城は三の丸の門、多門櫓、高塀などが破損しました。また、現在の熱田区神戸町付近にあった熱田奉行所は大破し、近辺の浜の鳥居回りまで津波が来たことが記録されています。「あつた役所等大破損、浜の鳥居辺津波の水入、深き所八四尺」(青窓紀聞)



【青窓紀聞表紙】

市東部の緑区鳴海辺りでも天白川の堤が破損し、被害が出ました。また、当時東海道五十三次40番目の宿場であった「⑪鳴海宿」内の旅籠屋(旅人の宿泊・食事処)も地震により破損しました。「天白川切れ鳴海辺も大騒動」(青窓紀聞)

湾内に浮かんでいたイカダの木材等が赤く濁った水と共に山の如く堀川を逆上し、津波は⑫尾頭橋付近の辺りまで来たようです。「堀川津浪といふ、是ハ八方新田道徳新田堤きれ何分津浪二相違なく(中略)未の刻より海へ落戻るといふ・・・」(松濤樟筆)



【松濤樟筆原文】

治水工事・落雷

天明3年末明(1783年)

庄内川で起きた洪水により西区の⑬大野木堤が崩れましたが、領民たちは自分たちで大野木堤の普請(修復)を始めました。



【庄内川の治水事業の様子】

文化10年末明(1813年)

尾張藩は治水工事の一環として、⑭庄内川氾濫の禿地(つぶれち)を図面化した地図を作りました。禿地は荒地になって収穫できない土地のことを指します。



【尾張藩が作成した禿地の図面】

天明5年末明(1785年)

尾張地区一帯で雷雨があり、市内で多くの落雷が見られました。特に昭和区御器所地区や中川区⑮荒子・高畑地区など市の南部に被害が出たようです。雷という災害のイメージがありませんが、愛知県災害誌や鸚鵡籠中記には、多くの落雷被害があったことが示されています。